

した。標高は500メートル余り。預言者エリヤはこの山に、イスラエル各地から、イゼベルによって養われている450人のバアルの預言者達と、400人のアシェラの像を信ずる400人の預言者たちを集めるようにと告げました。バアルはカナン肥沃神で天候を司り、農耕のかぎを握ると信じられていました。イスラエルの民も王たちの影響で、この神を受け入れるようになっていました。アシェラはカナン宗教の肥沃祭儀の礼拝の対象とされる女神の象徴でした。400人のアシェラの預言者が集められたというほどに、アシェラの神への信仰はカナンに、相当に広がっていました。

②カルメル山に(20)「**そこで、アハブはイスラエルのすべての人に使いをやり、預言者たちをカルメル山に集めた。**」興味深いことにエリヤの提案をアハブが即座に受け入れています。エリヤの言葉に権威があったのでしょうか。アハブからすれば、自らの力を誇示する好機と考えて、エリヤの言うところを受け入れたのでしょうか。こうして、カルメル山にはバアルの預言者450人とアシェラの預言者400人が集められたのです。

③主かバアルか(21)「**エリヤはみなの前に進み出て言った。『あなたがたは、いつまでどっちつかずによろめいているのか。もし、主が神であれば、それに従い、もし、バアルが神であれば、それに従え。』しかし、民は一言も彼に答えなかった。**」そこで、エリヤはそれらの人々を前にして、具体的な提案をします。「あなたがたはいつまでも迷っているのですか。この際、主が神であるとわかればその方に従い、バアルが神であることが判明するならそれに従うようにしたらどうかという提案でした。民はそれに対して答えることをしませんでした。

3. エリヤとバアルの預言者達 (22~24 節)

①私ひとり(22)「**そこで、エリヤは民に向かって言った。『私ひとりが主の預言者として残っている。しかし、バアルの預言者は四百五十人だ。』**」黙る民に対して、エリヤは言います。「主なる神の預言者は私一人だけです。しかし、誰にでもわかるようにバアルの預言者は450人います。」この大なる対比。1対450です。普通の勝負ならば、勝つ可能性は低いです。

②二頭の雄牛を(23)「**彼らは、私たちのために、二頭の雄牛を用意せよ。彼らは自分たちで一頭の雄牛を選び、それを切り裂き、たきぎの上に載せよ。彼らは火をつけてはならない。私は、もう一頭の雄牛を同じようにして、たきぎの上に載せ、火をつけないでおく。』**」それでは、その勝負する方法と内容はどんなものなのでしょう。まずは、二頭の雄牛を用意させるのです。バアルの預言者は一頭の雄牛を選んで、それを屠って、たきぎの上に載せるのです。同様に、エリヤも一頭の雄牛を屠り、たきぎの上に載せるのです。そして、双方とも火をつけないでおきます。

③火をもって答える神(24)「**『あなたがたは自分たちの神の名を呼べ。私は主の名を呼ぼう。そのとき、火をもって答える神、その方が神である。』民はみな答えて、『それがよい』と言った。**」その上で、バアルの預言者達は、自分達の神の名を呼んで、たきぎに火をつけてくださいと願うのです。また、エリヤも主なる神を呼んで、火をつけてくださいと願うのです。そして、どちらの神がそれに対して答えてくださるかを見ようではないかという提案でした。民はそれを聞くと、「それが良い」と賛意を述べたのでした。

《結論》

今朝の聖書箇所は、エリヤがオバデヤを介して、アハブと会うところから始

まります。エリヤは即座に殺されることはなく、一つの提案をすることでまでたどりつきました。主なる神とバアルの神のどちらに真の力があるのかを、問うています。それにしても、そのことが明らかにされるために、サポーターとしてバアルの神側の預言者数は450人なのに対し、主なる神の預言者はなんとエリヤ一人だけだったのです。この戦いは預言者数から考えると、1対450ですから勝ち目はありません。しかし、エリヤは臆することなく、真正面から対決をしようとしています。聖書にある次のような出来事が思い出されます。

第一に、勇士ギデオンのことです。彼がミデアン人と相対した時のことです。イスラエルの民について、主なる神は恐れおののく者は離れよと言われました。すると、民の二万二千人が帰り、一万人が残りました。ところが、主はまだ民が多すぎると言われます。そして、民のうち水のある所で、犬がなめるようにして、ひざをついて飲む者は帰らせました。しかし、ひざをつかず手で水を飲む者たちはそこに残りました。その人数はたった300人。相手のミデアン人、アマレク人たちは海辺の砂のように多かったのです。ギデオンは主を礼拝しつつ、この300人を3隊に分けました。夜になって、この全員に角笛とたいまつを入れたつぼを持たせました。ギデオンは相手方の陣営近くに来てから、兵たちに角笛を吹かせ、つぼを打ちこわさせます。そのけたたましい音を聞いた相手方は恐れ惑い、同士討ちをし始めたのです。こうして数においては圧倒的に少数のギデオンが導くイスラエルが勝利したのです(士師記7章)。

第二は、サウルの子ヨナタンがペリシテ人に相対したときにも似たようなことがありました。多勢の相手方を前にしたとき、ヨナタンは「さあ、あの割札を受けていない者どもの先陣のところへ渡ってこよう。たぶん、主がわれわれに味方してくさるであろう。大人数によるのであっても、少人数によるのであっても、主がお救いになるのに妨げとなるものは何もない」(第一サムエル14:6)と言い、前進を続けるなかで、相手方は同士討ちをするようになり、イスラエルが勝利

するという出来事です。

今、エリヤは 450 人のバアルの預言者達を相手に孤軍奮闘のように見えますが、エリヤには確信がありました。どんな多数にも勝る、主なる神が後ろ盾になってくだされば、何も恐れることはないという確信でした。

「恐れるな。わたしはあなたとともにいる。たじろぐな。わたしがあなたの神だから。わたしはあなたを強め、あなたを助け、わたしの義の右の手で、あなたを守る」(イザヤ書 41:10) とありますが、エリヤは主に信頼してこの対決に臨もうとしていたのです。

私たちの主イエス・キリストもいざ十字架への道に進む時には、たった一人でした。そして、その身に十字架をお受けくださいました。敗北に見えた十字架は、主の愛の最終的な結実としての勝利でした。私たちの歩みにも、孤独なことがあるでしょう。目の前の戦いに不安を覚える事もあるでしょう。しかし、主を仰ぎ、共にいてくださる主に頼り、困難な戦いに立ち向かっていきましょう。